
東北大学陸上競技部

OB・OG 通信

2025 年 VOL.1 (2025.4)

≫学連春季競技会にて、白鳥名花(2)が 11.98(+1.7)の部記録達成

目次

●主将・女子主将・各 PC より今年度及び東北インカレの抱負	-----2-5 ページ
●令和 6 年度全日本大学駅伝報告	-----5-10 ページ
●令和 6 年度三秀総会	-----10 ページ
●令和 6 年度卒業祝賀会	-----10 ページ
●自己ベスト更新者	-----11 ページ
●今後の予定	-----11 ページ
●編集後記	-----11-12 ページ

新緑の候、会員の皆様にはますますのご発展のほどお喜び申し上げます。

今号では、今年度ならびに東北インカレの抱負を中心に、今年の1月以降に開催された大会における選手の活躍を報告いたします。

今年度も変わらぬご支援を賜りますよう、何卒宜しくお願い申し上げます。

◎主将・女子主将・各PCより今年度ならびに東北インカレの抱負

◆主将 倉部彰土

2024年七大戦より主将を務めております、倉部彰土と申します。平素よりOBOGの皆様には多大なるご支援、声援を賜り、心より感謝申し上げます。

さて、今シーズンに関してですが、私たちは「七大戦優勝」及び「東北ICにおける仙台大学との差を30pt以内に縮める」という二大目標を掲げ、チーム一同取り組んでいます。

まず七大戦について報告いたします。昨年度は男子総合2位、女子総合3位と、近年と比較しても大躍進といえる成績を修めることができました。前主将・西尾が掲げた“強いチームに向けた土台作り”の成果が想像以上に大きいものとなったことを実感しており、嬉しく思うと同時に、主将としてその土台の上にさらに良い結果を築くべく、気が引き締まる思いでいます。昨年はチーム全体として成長が見られた一方で、トラック種目では上位校との差が開き、優勝には一步届きませんでした。今年は、昨年京都大学に取られた王座を奪うべく、各パート研鑽を積んで参りました。具体的には、前シーズン終了後、個人・パート・全体での目標を部室に掲示し、日々その目標を意識しながら冬季期間を過ごしてきました。特に個人目標については、持ち記録順に掲示することで正選手のラインを常に意識できるようにしました。春季に入ってから記録会でも、部記録をはじめ好記録が出ており、正選手選考に頭を悩ませているPC達を、幸せな悩みだと微笑ましく見守っています。

次に東北インカレについてです。男子総合では、部員数の増加もあり、近年は表彰台に登っていますが依然として優勝には届いておりません。ここ数十年、東北大学は一度も東北インカレで優勝できたことが無く、これを打破するためには、長期的な視点に立った計画が必要であると考えました。そこで、連覇が続いている仙台大学との差を、過去2年間の50ptから30ptに縮めることを目標としました。これは複数年にわたって取り組むべき課題であり、将来的な優勝を見据えた第一歩です。この目標は、来年以降、部をけん引する主将陣にもバトンをつないでいきます。これからの成長を、長い目で見守っていただけますと幸いです。

ここまで対抗戦への抱負を述べてまいりましたが、競技の結果以外にも、OBOGを始めとした皆さんに注目いただけるようなチームになりたいというのが私の想いです。その一つとして、応援に磨きをかけていきたいと考えています。昨年の七大戦では、OBの及川さんからご教示いただいた応援歌「緑の命」を熱唱し、アツい応援で盛り上げることができました。今年度は、応援練習を徹底し、一体感のある応援で「選手が気持ちよく競技に集中でき、観戦している方も楽しめる」応援を目指していきます。もし、お時間がありましたら、対校戦や普段の評定河原の練習にも足を運んでいただければ幸いです。

今シーズンも、皆様に良い報告ができるようチーム一同取り組んでまいります。引き続き、温かいご声援のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

◆女子主将 加賀谷美結

2024 年 8 月より女子主将を務めております、加賀谷美結と申します。七大戦まで残り少ない任期とはなりますが、引き続きよろしくお願いいたします。

始めに、今年度の女子パートの抱負について述べさせていただきます。女子パートは現在、「個人がチームを強くし、チームが個人を強くするチーム」で対校戦を勝ちに行くことを目標としています。個人の努力や頑張りがチームに良い影響を与え、また、チームが一丸となって個人の競技力・サポート力の向上を支えるチームをつくる、ということです。昨年度、先輩方を主体に部全体で取り組んだ「強いチームに向けた土台作り」を通して、多くの部員が自己ベスト、大学ベストの更新や入賞などの飛躍を見せてくれました。チームとしても、競技を行う一個人としても、誰かの頑張りに力をもらった年でした。また、私にとって昨年度は競技面で悔しい思いをすることが多い年でもありました。一度は諦めかけた目標を、また追いかけてみようと思えたのは同期の励ましや、女子パート・陸上競技部の皆の支えがあったからです。私個人が仲間に励まされたように、チームまたは個人がどのような状況にあっても、それぞれの活躍やサポートがチームや個人を励まし活気づけ、さらに良い結果をもたらすことができるようなチームを目指し続けます。そのためにも、就任時から意識してきた女子ミーティングでの話しやすい雰囲気作りや、周りの意見に耳を傾け、周りから学ぶ姿勢を大切にしながら、一つ一つの試合を皆で戦い抜きたいと思います。

最後になりますが、現在に至るまで私たちが不自由なく活動が続けてこられたのは、いつも私たちを支えて下さる部長、監督をはじめとする先生方、そして三秀会の OB・OG の皆様の支援のおかげです。心より感謝申し上げます。今シーズンも、皆様に良い報告ができるよう、チーム一丸となって頑張りますので、温かく見守っていただけたら幸いです。

◆短距離 PC 神近凜太郎

昨年 8 月より短距離 PC を務めております、3 年の神近凜太郎です。

今年の短距離パートは、「対抗戦の得点に大きく貢献すること」を目標にしています。昨年度は、個人種目でほとんど点数を取ることができなかったため、今年度は、より多くの選手が決勝に残り、対抗得点に貢献できるように努力して参ります。

今年のシーズンインは、順調とまではいかないですが、いい流れになりました。ぜひ今シーズンの活躍にご期待ください。

◆ハードル PC 水澤大地

本年度、ハードルパートは全員が PB 更新、そして七大戦で出場する選手全員が得点を取る(6 位以内)の 2 点を目標に掲げ日々の練習に取り組んでいます。昨年度は前任のハードル PC のもと先輩方をはじめ多くの部員が PB を更新するなど大きな成果を上げました。しかしながら全員 PB 更新にはあと一歩及ばず、七大戦では男子 110mH と男子 400mH で全員決勝を果たしたものの惜しくも全員得点とはなりませんでした。

その反省を踏まえ今年度は改めて上記の二点の目標として掲げより一層の努力を重ねております。すでにシーズンインの段階で PB に迫る好記録を出す選手もあり 5 月の東北インカレにむけて良い流れができつつあります。この勢いのまま東北インカレ、七大戦に果敢に挑み部全体の目標に貢献していきます。

また、末筆ながら今年フレキハードルを購入させていただいたことを改めて御礼申し上げます。これはひとえに OBOG の皆様の支援のおかげであり、充実した環境の中練習出来ることに深く感謝しています。今後ともご支援、ご声援のほどよろしくお願いします。

◆中距離 PC 錦戸昂雅

一昨年(2019)の12月から中距離 PC を務めております、3 年の錦戸昂雅です。日頃の皆様のご支援、ご協力のおかげで私たち部員は日々充実した活動ができております。この場をお借りして感謝申し上げます。

今年度の中距離のパートの目標は「全員 PB 更新」と「七大戦・東北インカレ共に中距離種目の総合点優勝」です。昨年は中距離パートから複数人の全カレ出場、部記録更新、そしてほぼ全員が UB もしくは PB を更新することができました。それでも七大戦では年々上がるレベルの中で得点争いをする事ができず、悔しい結果となりました。今年度は昨年正選手で戦った選手に加え、下級生の実力も確実についてきているため十分に目標を達成できる位置にいると感じています。東北インカレも七大戦も中距離パートが東北大を引っ張って行けるようなパートになれるよう、また更に努力していくと共に、自らもその一員として貢献できるよう競技力を高めていきたいと考えています。

今年度も目標を達成できるように精進して参りますので引き続き応援のほどよろしくお願いいたします。

◆長距離 PC 松本修哉

昨年 11 月から PC を務めさせていただいております、3 年の松本修哉です。昨年度も OBOG の方々をはじめとする多くの方のご支援のもと、日々の練習と大会への出場によって様々な記録を残すことができました。この場で改めて感謝申し上げます。

今年の長距離パートの目標は「全日本大学駅伝予選会での優勝と、全日本大学駅伝での活躍」です。ここでいう活躍とは、他の国立大学に勝つことや、部記録の更新です。今年は全体的に部員一人一人のレベルが上がっており、層が厚くなってきていると感じています。昨年活躍した先輩方が一部なくなりましたが、最近では 2 年生や 3 年生の伸びもすごく、低学年の活躍も十分に期待できる状態にあります。4 年生以上の選手も今シーズンにかけてかなり調子が上がってきており、対抗戦に関しても多くの点数がとれるという見込みです。

今年は予選会の形式が変わり、10000m トラックでの選考となる予定です。各種大会の時期が少し早まるなど、例年と違う部分も多々ありますが、柔軟に対応してこれからのシーズンしっかりと走り込みたいと思います。個々人の走力をあげ、全国でも戦えるような強いチーム作りを目指していきます。自分自身もチームの戦力となれるよう、PC としての自覚をもって真剣に練習に取り組んでタイムを狙っていききたいと考えております。

今年も引き続きご支援や応援をよろしくお願いいたします。

◆跳躍 PC 柴田駿吾

跳躍 PC を務めさせていただいております。柴田駿吾です。

跳躍パートの今年度の目標は「対抗戦に多いて全員が得点する」です。特に、学部生は七大戦を中心に、院生は東北インカレにおいて得点することを主眼に日々練習に取り組んでおります。

冬季練習は期分けを意識して、前半は筋肥大、全身のパワー向上、後半は跳躍につながるような筋力アップ、ジャンプ技術の向上のなどを特に重視したメニュー構成にしました。また、各部員が他パート

との兼ね合いでメニューとして設定することは出来なかったウエイトレーニングも週2程度の頻度で取り組んでおり、全員が今シーズンにおける目標達成に向けて必要なことを考えながら日々の練習に向かってきたと言えるのではないのでしょうか。シーズン中は競技を意識したより質の高いメニューに取り組んでいき、冬季練習で積み上げてきたものを跳躍につなげていけるようにしていきたいと思っています。

先日多くの部員がシーズンインを迎え、数名の部員は早くも PB、UB を更新するなど良いスタートを切ることが出来ていると思いますので、全員がこれに続いていけるように自身がパートを先導するという責任感をもって努力して参ります。応援よろしくお願いいたします。

◆投擲 PC 増田併介

投擲 PC を務めています。増田併介です。今年度の投擲パートの目標は「対抗戦において出場する全種目で得点」することです。今年度から投擲パートはメニューを作り、パート全体の練習量の確保、団結力の増加を行いました。練習メニューはどの種目にも最低限必要なものをバランスよく行い、残りの時間は個人で自分に合った練習を行っています。

また、外部から指導者を呼んだり、東北地区の高校生から社会人まで幅広い年代の競技者を東北大グラウンドに集めたりして、合同練習を行いました。今まで交流が少なかった宮城教育大と仙台大との合同練習も決定しています。

昨年度は団結力や練習量に問題を抱えていた投擲パートですが、今年はその弱点を克服するような変化を与えたので目標達成に大きく期待しています。

最後になりますが、日ごろから東北大学陸上競技部を応援してくださっている OB・OG の皆様にこの場を借りて感謝を述べさせていただきます。投擲パートのメンバーの活躍はもちろん、私自身も相応しい結果を残せるよう日々の練習に励んで参りますので、応援のほどよろしくお願いいたします。

◎令和 6 年度全日本大学駅伝報告

文責：東北大学陸上競技部駅伝監督 佐藤健二

1. 初めに ― 全日本大学駅伝東北地区予選会以降

昨年 (R6 年) 全日駅伝予選会の報告で、駅伝本選は大いに期待できると書いてしまってから、半年が経過した。その本選の結果は、みんなが知っている様に、記録としては本選出場史上、最悪の結果となった。その結果責任は、全て駅伝監督が負うというシンプルな原則を基に、以下駅伝本選の報告を行う事とする。

戦前の小職の戦力評価では、出雲駅伝のアンカーで好走した向田、同じく出雲に派遣された千葉の両名は、依然として好調を保っているが、ベテランの院生工藤は、長期のレースにおける不調、長距離主将杉山は、責任の重さ故の疲労蓄積、深澤はほとんど直前になって判明する持病（気胸と考えられる）に、各々苦しめられていた。いずれも、チームの屋台骨となる人材だけに、復調が期待されていた。一方、予選会 16km の部で予想以上の走りを見せ、学院大に大差で勝利した、立役者の一人一年生出田、及び 10 月上旬の 10kmTT をあっさり 31 分 02 秒で走り切った医学部 5 年新田の出現により、興味深い本選になるものと期待された。

ターゲットは、新潟大と、青山学院大から移籍したランナーが引っ張る岡山大。

2. 本選レポート（当日）

2-0. 戦（選）前

早朝 4 時起床。既に 1 区千葉、2 区新田は 4 時には早朝 jog をすませているだろう。ホテルは、中国からの客で、ほぼ満室。選手たちは良く眠れただろうか？千葉、新田を付添いと共に選手送迎バスであたふたと送り出した後、マネージャー田中君と共に急ぎ脚で地下鉄矢場駅へ向かい、栄で朝まで騒いでいた連中と、地下鉄で神宮西駅まで。熱田神宮内の木々に囲まれた薄明の選手テント。今年は國學院大學（出雲優勝）と同じテントに同居。この時は、國學院大が青山学院大と終盤の激闘の末、優勝する事になるとは、夢にも思っていない。小職は、1 区千葉の身心の状況を本人に気付かれぬ様観察するので精一杯。そこへ裏社会を知り尽くしている幹事長村橋君が、‘関係者以外立入り厳禁’の当エリアに裏ルート進入。「選手の具合はどうかネー？」とエラそうに。それは真に、俺が知りたい事だ！

2-1. 1 区（9.5km、26 位） 千葉航太（医 3）

8 時には、田中君と、大音声の応援を背に梅バス乗車（松竹梅、3 台の監督バスが出る）梅バスには、同レベルと想定されるライバル校も乗車。8 時 10 分スタート。千葉のフォームはファーストフットと称され、つま先で走るタイプ。スピードは出易いが、長い距離を走り抜くには多大な訓練が必要。性格的には、格闘技型で、一見エキセントリックな言動が目立つ。ここ数年 1 区の選定は迷う事が多かったが、今回は迷う事無なく指名。集団は、ローペースの入りだった事もあり、中盤まで集団中央におり、どや顔が全国に配信された。久し振りの 1 区最下位脱出。

2-2. 2 区（11.1km、26 位） 新田友海（医 5）

昨年 6 月ごろより、本人の希望により、医学部陸上部より移籍。力感の無い、軽やかなピッチ走法。練習においても、すぐに長距離上位の連中と同等かそれ以上の能力を発揮。しかも医学部生にしては某×木先輩と異なり、珍しく謙虚な姿勢。予選会には間に合わなかったものの、10 月上旬の 10kmTT であっさり 31 分 02 秒をマーク。あたふたと学連登録を変更し、全日駅伝の 2 区担当に抜擢。2 区は 1 区と合わせて評価される、序盤の鍵となる区間だ。従来と異なり、1 区千葉が予想外に良い位置でタスキを運んで来た事もあり、本来の良さである軽快なピッチに余分な力が入ってしまい、後半の自然な伸びを欠いてしまった。全国レベルの大会経験の少なさが影響したものと思われる。

2-3. 3 区（11.9km、27 位） 照内優允（医 2）

東北地区予選会 10km の部で、オープン参加の仙台大選手を除き、一着でゴール。二年生の中では筆頭の位置まで成長。コンパクトなまとまったフォームだが、千葉、杉山の様な破壊力に欠け、まだ学院大上位陣には通用しない。成長期のアンバランスな体を怪我なく発達させる為に、練習ではどうしても慎重さが目立ってしまう。全国レベルの戦いにおいて、可もなく不可もなく、今の本選下位レベルのチーム内でオペレーションすると言う事は、そのまま他チームには全く歯が立たずに終わってしまうという事も意味している。しかし、発展途上にある選手の場合、過大なトレーニングを課す危険を取るよりは、我慢しながらの継続を取るべきなのは、当然の事なのである。焦るな、あせるナ！

2-4. 4 区（11.8km、27 位） 杉山大輔（工 3、長距離主将）

千葉と二人で、長距離部門を再度伊勢路に導いた最大の功労者。七大戦 3000mSC4 位と奮闘した後（又バツタリ倒れて医務室に運び込まれた）、体調低迷が続き、東北地区予選会 16km の部、東北大学

チームでは4位（学院大の下位には勝っている）と、本人にとっては不本意な結果に終わり、全日本選でもみんなが期待していた7区のエース区間を台頭著しい一年生に明け渡すことになってしまった。杉山の長所でもあるレースにおける徹底的な集中の繰り返し（レース後医務室に運ばれてしまう様な）が長期の深い疲労を呼び込んだとも推察される。

本選においても、本来のストライドの伸び、力強さに欠け、本人にとっては比較的楽な区間であるにもかかわらず、自分に対するもどかしさも加わり、眉間のしわをより深める結果となった。

2-5.5区（12.4km、27位） 工藤大介（工M2）

6年間当チームを支え続けた精神的支柱。昨年の別府大分マラソンで、初マラソンにもかかわらず、2時間28分台で完走。しかし、ほかの比較的短いトラック、ロードレースにおいては、3～4年生頃の粘り強く重厚なピッチ、ストライドが戻らず、不本意な結果に。東北地区予選会でも、16kmの部のエントリーが期待されていたが、10kmの部に甘んじた。豊富で熱心なトレーニング負荷と、程良い休養のバランスが一時的に崩れてしまった事が原因か…。最後の伊勢路で結果を残せなかったが、6年間御苦労様！

2-6.6区（12.8km、27位） 深澤昇悟（工3）

一昨年も当区間を担当し、経験という意味では十全の状況だった。昨年の冬期の怪我から回復し夏合宿の頃から、従来の力を取り戻し始め、地区予選会では10kmの部でも、学院大の中下位の選手を抑えて、復活をアピールした。ただ本来の端正なストライドに、一步一步の力強さが伴っておらず、少々首をかしげる日が続いた。

10月に入ってから、どうやら持病とも言うべき、気胸の症状が出ていた事が判明。自然治癒したとの事。復調が長引いた原因は持病と判明したものの、本選までの回復のレベルが懸念された。本選においては、端正なストライドは戻ったものの、力強さに欠け、一昨年の自己記録にも及ばなかった。持病（気胸）と対峙しながらのトレーニングは恐怖心（気胸はかなり痛むとの事）を抱えながらのものになると推測される。青年時の体質はその成長により、改善されて行く。あきらめず、根気強い対応が長期に渡って求められる。

2-7.7区（17.8km、27位） 出田義貴（工1）

夏合宿では、並いる諸先輩を押しつけて頭角を現わし、予選会16kmの部では学院大のWエースに秒差で敗れたものの、そのアドバンテージを消し去り、16kmの部大勝の立役者の一人となった。長い距離（10km超）におけるレース経験は、地区予選の16km程度しかなく、ましてや全国レベルの駅伝経験も無いが、不調が長引く主将杉山に代わって、当エース区間（今回も、國學院大・平林、駒沢大・篠原、青山学院大・太田らが激闘を繰り広げている）をまかせる事に。

当区間は、道路交通事情から監督車（梅バス）は区間途中で降車しての応援もできず、電波状況から中継TVも映らない。田中君の携帯経由での路上応援団からの情報のみが頼りとなる。当駅伝中盤区間での不調はあり得ると覚悟していたが…。田中の携帯からの情報に、一気に表情が強張るのを感じる。7区全長17.6kmの途中10km前後で出田がふらつき始め、棄権もあり得るとの事。昨年の東北地区からの出場校、学院大の5区棄権の情報が頭を過ぎる。あと残り7km以上をそんな状況で走り切れるか？そんな非常事態なのに、このバカ監督は、手も足も出ない。

出田の文字通り必死のゴール後応援していた女子マネージャー達の話総合すると、途中でフラつき始めた出田を沿道の観戦者が声援しようとして、女子マネ達に「名前はなんだ？」と尋ねて来た。そこで「イデタ」と教えると、その場でイデタコールが巻き起こり、7区のゴールまで声援で推してくれたと言う。当日の気象状況は公式発表によると、天候晴れ、気温22℃、北西の追風。しかし、一説によると、気温は28℃まで上昇し、それに長い距離の経験不足やライバル達のレベルの高さも重なり、脱水症状に陥る条件は十分にそろっていた。もし小職が沿道にいたら、レースを止めて棄権となっていたかもしれない。正に彼自身の責任感、粘り強さに、女子マネージャー達の献身的で気転の利いた応援、沿道の観客のぶ厚い声援が後押しし、東北大チームは棄権の危機を回避する事となった。

2-8.8区(19.7km、21位) 向田祐翔(工4)

満を持して、千両役者登場。昨年の長距離主将。昨年の東北地区予選会における敗戦を同じ予選会における16kmの部圧巻の独走により、リベンジ。出雲駅伝でも、アンカー区間を担当し、その好調さを維持したまま、全日駅伝に対峙することとなった。一斉スタートの中、正に当区間のスペシャリストで同郷の高橋(佳)を彷彿させる、キレは無いが力強いストライドで、ぐいぐい前進する。伊勢神宮ゴールで応援、観戦しているお客様には、もしかして東北大は、チームとして中位でゴールしたと錯覚させる様な激走だった。彼の昨年度からの雪辱の旅は、ここに完結した。

3. ‘失敗’の教訓(敗戦の将、兵を語る)

ここで言う‘失敗’とは監督の当チームに対する管理能力についての問題点を指している。

3-1. 新戦力の価値と脆弱性

2-7で述べた様に、出田(工1)の東北地区予選会までの勢いは、正に‘飛ぶ鳥を落とす’ものだった。しかも、経験の乏しい筈の16kmの部に出場して、学院大のWエースに最後まで喰い下がったと言う実績が目眩しとなった。16kmのゴール400m手前で一瞬、緊張の糸が切れたかの様にグラついて転倒しそうになったという事実も、エース区間登用という決定の障害にはならなかった。システム屋にとって、システム障害の発生は‘考えうるテスト条件から漏れていた条件の下に起きる’という鉄則がある。新戦力の新戦力たる由縁は、その十分なテスト期間を経ずに、機能の素晴らしさにのみ目が奪われるという危険性を常に合わせ持っているという事である。そしてこの一年生は通常のレースなら‘やめた!’と言ってもいい、残り10kmの道のりをほとんど気力で乗り切ることになる。先輩のチームメンバー達が一年間にわたり築き上げて来た駅伝レースをぶち壊しにしない為に。

同様に、2区新田(医5年)についても、普段の真面目に練習に取り組む姿勢や、10月上旬の衝撃的な10km31分の好成績に目を奪われてしまったが、同時に全日本レベルで競い合う経験が無く、長いロードレース経験も乏しいという点も見逃してはならなかった。2区の競り合いながら、速いペースで展開される駅伝レースにおいて、持ち味の柔らかなピッチ走法は影をひそめてしまった。

又、東北地区予選10kmの部で照内に続いてゴールした上原(筑波大出身、中距離パートM1)は、その成績において本選出場の工藤、深澤を上回ったものの、これまで積み重ねて来た実績において、突出した成績とまでは言えないとの信頼性への評価で、本選出場はならなかった。

以上、新戦力の採用に当たって、多くの考慮点があり、小職が本選までの残された短い期間にいかに関与したかの判断ミスをしてしまったか、整理してみた。当経験を教訓としながら、次の場面に対応して行く必要がある。尚、本駅伝後、そのダメージの大きさにより、文字通り脚が固まってしまっていた出田は、

今年1月頃から走り始め、4月の春季学連競技会で10000mを独走し、生意気そうな顔で何事もなかったかの様に、勝利した。

3-2. ベテラン勢の体調不良、バイオリズムコントロール

次は、当チームを支えて欲しいと望まれていた（小職が勝手に望んでいた）三名のベテランの不振について分析してみる。まず、長距離主将、杉山（工3年）は、夏の七大戦3000mSC4位入賞以来、長期の不調に陥っていた。2-4で述べた様に、レースに臨むに当って、徹底的に追い込むという静かな闘争心（本能？）で対応し、レース後の深い疲労に対する休養のとり方が課題とされて来た（そこが魅力でもあるのだが）。駅伝主将として、チームを昨年の敗北から立ち直らせる為、夏期合宿、予選会対応と息を継ぐ間もない状況が連続し、全日駅伝本番は、とても万全の状況とは言えない体調、精神状況で臨まざるを得なかった。13か月に渡る主将就任期間の重荷を伊勢路におろした後、一時精神的にも落ち込んでいたが、春に入り、彼本来のノビノビとしたストライドが戻ってくると共に、3000mSCの障害も軽やかにクリアする姿が見られる様になった。

今回最後の大学駅伝に臨む事になった工藤（工M2）は、同期の仲間達がほとんど離れて行った中、当チームの精神的な支柱として、レース、練習両面で奮闘して来た。今回は、3年前、実質的に当チームのエースとして活躍していた頃に比べると、一步一步の力強さが低下し、後半の粘り強さも欠けていた。フルマラソンでの成功を考え合わせてみると、体質がより向上する為の変化の時期に当たるものと思われる。気軽に、自信を持って、より自由に楽しみながら、競技を続けてみて欲しい人材。寡黙な東北人。‘男は黙って××ビール’

深澤（工4）については、練習、勉強共に真摯に取り組む姿勢が目立ち、唯一の懸念材料が持病とも言うべき気胸だった。どうも体調がおもわしく向上せず、10月に入ってから、どうやら気胸が再発したらしいと気づいたが、自然治癒していた模様。ただし、本選では、彼本来の端正なストライドに、力強さは、完全には戻らなかった。厳しい話になるが、持病も含めて自らの特性と捉え、恐れず根気強く対応して行く事が望まれる。あきらめるな！

このベテラン3名に共通しているのは、いずれも真摯に練習に取り組んでおり、体調管理についても、その重要性を理解していた事だ。小職の経験上、バイオリズムの管理は重要であるが故に困難で、3名共、大きく言えば内蔵機能も含めた長距離ランナーとしての体の完成前夜の苦しみともとらえられる。

3-3. 明日の光

今回、タイム的には最悪の結果だったが、7区のフンバリ走により、最悪の結果が残せることになった。又、1区千葉の長時間集団のまん中でTVに映ってしまった怪走。8区向田の素人観客を東北大は中位でゴールしたと誤解させた本物の快走。そして、全日本大学駅伝と言うハイレベルな試合での、様々な失敗を通しての学習。たまたま出場しなかったメンバーも想像上の‘イデタ’コールを胸に刻み込んで、毎日のトレーニングに励んで欲しい。来年からは、東北大長距離における‘猪木（イノキ）’コールになるかもしれない。沿道にコールの波を起してくれた応援の女子マネージャー、ありがとう。多大な応援及び寄付してくれたOB、OGの皆さん、ありがとう。どんな失敗にも意味があると知ってもらえたら…。

炎天の 伊勢路は長し コール推す

東北大学駅伝監督

◎令和 6 年度三秀総会(2024/12/7)

開催地：仙台 バルレストランモデルノ

2015 年から東京にて三秀会総会が開かれるようになりましたが、今年度は久しぶりに仙台にて開催されました。

村橋幹事長(S58)の開会宣言の後、岩渕会長(S47)が挨拶を述べました。総会は、村橋幹事長が議長を務め、令和 6 年度活動報告、会計報告が行われました。そして、令和 7 年度活動計画、予算審議が行われ、承認されました。また、東北支部の設立が承認されました。役員改選では、東北支部長の宮野知生さん(H2 卒)、関東支部長の古沢賢一郎さん(H4 卒)に加えて、活動の充実をはかるべく関東支部幹事の和泉俊介さん(H8 卒)、多田尚子さん(H9 卒)、吉沢協平さん(H11 卒)が選任されました。また、令和卒の幹事の人選は会長に一任することとなりました。

総会の後、同会場にて忘年会が行われました。参加者全員から近況報告していただきました。

出席者(敬称略)

小野厚夫、藤田文夫、岩渕明、源栄正人、佐藤健二、柴田清、大浦譲、深澤博、
後藤康宏、村橋光臣、三浦 得雄、岩松正記、宮野知生、久保正樹、吉田 真人、今泉卓真

◎令和 6 年度卒業祝賀会(2025/2/1)

開催地：ホテル白萩

この会は平成 24 年に始まり、現役部員諸君が卒業後に三秀会会員として活躍することを期待して企画しています。三秀会会員が今春学部を卒業する陸上競技部員を招待し、お祝いするという形式で開催しております。

今年は、2025 年 2 月 1 日(土)に仙台のホテル白萩にて着座形式にて開催されました。参加者は卒業生が 20 名、OB・OG が 14 名でした。更に当日参加ができなくて祝意のご寄付を寄せてくださった OB・OG が 5 名でした。

はじめに、岩渕明会長が卒業生諸君に祝辞を伝え、続いて佐藤源之顧問が乾杯の挨拶を発声され開宴となりました。暫く歓談した後、卒業生一人一人が、4 年間の競技生活を振り返るとともに、今後の進路および三秀会会員としての抱負を述べてくれました。また、参加した OB・OG にそれぞれご挨拶いただき、彦坂副会長の手締めにてお開きとなりました。

出席者(敬称略)

岩渕明、及川拓郎、佐藤健二、柴田清、佐藤源之、眞山隆徳、渡邊朝生、
村橋光臣、彦坂幸毅、加藤尚、宮野知生、本田秀樹、宮野憲子、久保正樹

祝意のご寄付(敬称略)

稲見文雄、大浦譲、池田光司、安井誠一郎、石黒一彦

◎自己ベスト更新者一覧(10/1~12/1)

男子 100m

岸本醒知(1)	11.06 (+1.0)	東大競技会(3/24)
小南慧馬(2)	11.12 (+1.2)	春季記録会(3/24)
鍵山弘樹(2)	11.32(+0.6)	学連春季(4/5)

女子 100m

白鳥名花(2)	11.98(+1.7)	学連春季(4/5)
---------	-------------	-----------

▲部記録更新!!

男子 200m

岸本醒知(2)	22.17(-1.2)	学連春季(4/5)
---------	-------------	-----------

男子 400m

斉藤宥哉(M2)	48.00	順大記録会(3/22)
岸本醒知(2)	48.75	学連春季(4/5)

女子 800m

喜多和奏(2)	2:21.07	関東学連春季オープン(3/18)
---------	---------	------------------

男子 800m

北島僚大(3)	1:56.32	学連春季(4/6)
瀬尾一真(2)	2:04.48	学連春季(4/6)

男子 1500m

北島僚大(3)	3:57.86	学連春季(4/5)
縣昌幸(2)	4:07.57	学連春季(4/5)

男子 5000m

照内優允(3)	15:09.42	学連春季(4/6)
熊谷慧(4)	15:47.49	学連春季(4/6)
竹田佳人(3)	16:04.35	学連春季(4/6)
庄司宥紀(2)	16:30.74	学連春季(4/6)
千葉広大(3)	16:51.68	学連春季(4/6)

男子 10000m

杉山大輔(3)	31:43(ロード)	赤羽(1/19)
田中伊織(3)	33:37(ロード)	赤羽(1/19)
山内滉介(2)	33:36.41	学連春季(4/5)

男子ハーフマラソン(21.0975km)

仲西旺生(2)	81:01	赤羽ハーフ(1/19)
出田義貴(1)	72:22	ふかやシティハーフマラソン(2/23)
佐藤壮真(2)	72:25	ふかやシティハーフマラソン(2/23)
城田健吾(1)	72:32	ふかやシティハーフマラソン(2/23)
鈴木拓真(2)	72:44	ふかやシティハーフマラソン(2/23)
山内滉介(1)	73:36	ふかやシティハーフマラソン(2/23)
熊谷慧(3)	73:38	ふかやシティハーフマラソン(2/23)
宮下尚丈(2)	74:19	ふかやシティハーフマラソン(2/23)
山中遼平(2)	75:00	ふかやシティハーフマラソン(2/23)
庄司宥紀(1)	77:23	ふかやシティハーフマラソン(2/23)

男子ハンマー投げ

富家彬就(M1)	41m63	学連春季(4/6)
----------	-------	-----------

男子三段跳び

久保田大聖(4)	14m06(+0.7)	いわき跳躍記録会(3/23)
----------	-------------	----------------

◎今後の予定

- ・5/16-18 東北インカレ (岩手・ウェスタンデジタルスタジアム北上)
- ・6/5-8 全日本インカレ (岡山・シティライトスタジアム)
- ・6/15 北大戦 (宮城・陶芸の里スポーツ公園陸上競技場)
- ・7/26-27 七大戦 (北海道・円山陸上競技場)

◎編集後記

気づけば桜が咲き、春の訪れを感じる季節になってまいりました。陸上部もいよいよシーズンインし、冬季練の成果を十分に発揮する時期となりました。各選手がPB 更新を目指すことはもちろん、これから始まる東北 IC 等の大会に部全体が一丸となって臨んでまいります。良い結果を報告できるよう、日々の練習に励んでまいりますので、今年度も東北大学陸上競技部へのあたたかいご声援をよろしくお願いいたします。

文責 OBOG 通信担当 宮下尚丈
編集補助 大村将伸、安藤彩澄

東北大学陸上競技部三秀会
〒980-0815 仙台市青葉区花壇 2-1
東北大学評定河原グラウンド内
hukumu_tohoku_ob2sin@yahoo.co.jp